

國學院大學學術情報リポジトリ

長門切からわかること：

平家物語成立論・諸本論の新展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 葦江, Matsuo, Ashie メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000274

長門切からわかること

— 平家物語成立論・諸本論の新展開 —

松尾葦江

一、長門切とは何か

古筆研究者の間ではよく知られている長門切という断簡群がある。世尊寺流の書風で書写された平仮名書きの平家物語断簡で、もとは卷子本だったらしく、通例では上下に界がある。三名以上の寄合書とされ、中には模写も含まれている。しばしば近世初期の古筆鑑定家によって付された世尊寺行俊または行尹筆との極札と共に伝来しており、長門切という呼称は、古筆鑑定家了伴（一七九〇～一八五三）が命名したらしい。近時、平

家物語の成立と初期形態に関連して注目されるようになってきた。^④

はやく平家物語研究と関係づけて長門切を取り上げたのは、昭和三〇年代半ば、藤井隆氏・渥美かをる氏であったが、その後は総括的な調査や考察が行われずにいた。平家物語研究では昭和四〇年代から延慶本古態説が一世を風靡し、しかし現存延慶本の本文がそのまま原態とはいえないことも分かかってきて、目下は、とりあえず延慶本を平家物語の初期形態に近いものとみなして、諸々の論が行われている。今後は読み本系本文の祖型探求が課題となるが、その際に注目すべき断簡が何種類かあ

り、長門切もそのひとつに数えられる。平成八年の時点で翻字・紹介できたのは四十葉であったが、二八年七月には七十七葉（所在の伝聞も加えればそれ以上）となった。

従来、何故この資料が成立論に結びついてこなかったのかというと、古筆切の年代判定は研究者や鑑定家の主観による、もしくは大きく幅があつて絞込みが困難なものと考えられ、これまで国文学の論証には取り入れにくかつたからである。しかし近年、炭素14年代測定法という科学的な検査方法によつて、料紙の原料が生物でなくなつた時点、つまり原料となつた植物が枯死した（料紙の製造された）年代が、幅を持つてではあるが推定できるようになった。現在この方法で測定された長門切は一点のみであるが、それによれば一二七三年から一三八〇年の間、特に一二八四年前後の可能性が高いとのことである。じつはこの年代は、「平家物語」の書名が資料に現れる最も早い時期から、三十年弱しか経っていない。寛一本制定よりも九十年近く前、延慶本の本奥書からも三十年近く前のことになる。ところが、長門切本文を現存平家物語諸本と対照すると、概ね源平盛衰記に近い（一部は延慶本・長門本に近い場合もあり、ときに独自異文もある）。これまで源平盛衰記は、平家物語諸本の中で最も後出性が高く、近世的・儒教的傾向が強いと

考えられてきた。それゆえ長門切が平家物語初期の本文であるとは受け入れがたいのか、未だに長門切の位置づけは、平家物語成立論の場で正面から吟味・検討されてはいないのが現状である。しかし、この資料の登場によつて大幅に変更しなければならぬのは、平家物語の成立年代ではない。平家物語成立後、比較的初期に存在した本文の具体的イメージであり、源平盛衰記をも含めた平家物語諸本の祖型から、その後現存本に至るまでの流動・変容の過程についての考え方なのである。平家物語研究にとつて、これは年代の変更よりもむしろ根本的な新展開ではないのか。殊に文学史の中で、流動する文芸として平家物語を考えようとするならば。

右のような見通しに立つて、新出資料を紹介しながら、長門切の位置づけによつて我々は何を変えねばならないのか、さきざき何が分かるであろうかを述べていくことにする。

二、新出の長門切をめぐつて

(一) 長門切の周辺

平成二七年七月、日比野浩信氏から御所蔵の世尊寺風断簡二種の写真をお示し頂いた。すでに「リポート笠間」59号で簡単

に紹介させて頂いたが、一点は上下に界があり、寸法も字数もほぼ長門切に合致する一行である。現在は裏打ちされているが「世□寺殿行俊卿」との裏書があったらしく見える。「世尊寺殿行俊卿／ハむする／極有」と記した札がついていたとのことである。

ハむするにハ矢比にたにも候ハ、たとひ下

「矢ころ（頃・比）」を手がかりに古活字版源平盛衰記や延慶本を検索しても、これに合致する本文は見いだせない。しかし「候」の語から会話文の一部であることが推測でき、射撃の手腕に関する言及（腕自慢か名手の推薦か）らしく思われる。「遠矢」や「那須与一」の記事が連想されるが、あるいは平家物語以外の軍記物語の一節かもしれない。

もう一点は上下に界があるものの寸法がやや小さく、いわゆる長門切ではない。「世尊寺殿行俊」の裏書と「世尊寺殿行俊卿 示給者彼」の極札（日比野氏によれば、神田道伴かとのことである）がついている。漢文日記の一部らしく、六行ある（～内は割注）。

示給者彼御返答云上達部可着有文帯蝶

鈿劍近衛司蒔絵劍壺胡録云々以是推量殿

上侍臣可着例文者午刻着隠文帯參殿

大宮権大夫右兵衛督三位中将被參午終殿

下令參内給（左大将參／御共給）先是内大臣被參内云々

殿下先令參昭陽舍給彼宮権大夫（季宗）出来

この一葉は、日本学士院所蔵手鑑『群鳥蹟』所収の漢文六行「将只可被仰」のツレかと思われる。内容は永保元年（二〇八一年）八月二一日の、皇太子実仁親王元服関連記事ではないかと推測されるのだが、『水左記』に習礼・元服当日の記事はあるけれども一致せず、『帥記』はこの箇所が欠けており、今のところ該当する史料名は見いだせていない。実仁親王の逸話は源平盛衰記卷一六「帝位非人力」にもあるが、本文は記録文体でなく一致しない。しかし世尊寺流の書体で、有界の料紙に写された、源平盛衰記記事にも共通する話題の断簡があるということは記憶に留めておきたい。

(二) 「敦盛最期」二葉

平成二七年晩秋に二度に亘ってオークションに出された二葉

(①)八行②九行。ツレ)が高城弘一氏の御所蔵となり、見せて頂くことができた。いわゆる手鑑崩しで、もと一葉だったものを貼る際に裁断したのではないかとのことである。上下に界があり、界高一七・〇、字高一六・八センチで、「世尊寺行俊卿」と記した札を傍に貼っている。②には擦れた痕があつて読めない箇所がある。内容は一ノ谷合戦の敦盛最期(蓬左文庫本源平盛衰記巻三八「経俊敦盛経正師盛亡」)の一部に当たる。本文は盛衰記が最も近いが、現存盛衰記には増補されたと思われる記事が大量に含まれている。なお源平盛衰記巻三八の部分の長門切は、初めての出現である。

①ハ熊替こそ

ハ熊替こそ一谷にてけに組たりし敵を
敵を(二字墨滅)逃して人にとられたれと云はれむ事
子孫に伝て弓矢の名を折るへしとて申
けるハよにも助けまいらせたく候へとも源氏
陸に充満ちて候へハ終に助かり給はん事
難有候御教養をハ直実能々可仕候後
の世の御事御心安く思食候へとて目を
塞き齒をくひしはりて御頸をそ給

②ハリける無

*二〓三行目の□は損傷のため難読、「」内は推定。
ハリける無慙とも疎也御むくろを引上
見奉り□□□「漢」竹の色なつかしき筆
簍を「香も」むつまじき紫檀の家にいれ
錦の袋ニ裏つ、鏝引合にそ被差たる
それよりしてそ熊替ハ発心の思も出来け
る此頸を取て手にさ、けて子息の小次郎
にやをれ此を見よ修理大夫殿の御子ニ無官
大夫敦盛とて今年十六と名乗給つるか
あまりに糸惜く糸惜く覚てたすけたて
*重複の三字左側にミセケチ。
源平盛衰記蓬左文庫本巻三八「経俊敦盛経正師盛亡」
(長門切の内容におおよそ合わせて行替えする。【】内は長門
切にない部分。以下同)
あひたに熊谷こそ一谷にてけにくみたりしてきを
のかして人にとられたりといはれんこと
子孫につたへて弓矢の名をおるへし思ひかへして申
けるはよにもたすけまいらせはよとそんし侍れとも源氏
くかにみちくたりとてものかれ給へき

御身ならず御ほたひをハ直実よく／＼とふらひ奉るへし
草のかけにて御覧せよ疎略ゆめ／＼候ましとてめを

ふさきはをくいあはせて涙をなかしそのくひをかきおとす
むさんといふもをろかなり

【敦盛不恐死不降心雖為幼令之人

頗非凡庸之類なり平家の人々只今うたれ給までもなさけを
ハ

すて給はすこの殿のいくさのちんにても隙にハふかんと
おほしけるこそ】色なつかしき漢竹の

笛を香もむつかしき（「か」は「ま」の誤写か）

錦の袋に入れてよろひの引あはせにさ、れたり

【熊かへこれをとりて見奉りいとおしや此ほと城中にこの
暁

物の音のきこえつるはこの人にておはしけりけんしの軍兵
は

東こくより数万きのほりたれとも笛ふく者ハ一人もなし
か

なれば平家の公達ハかやうにゆうにハおはすらんとて涙を
なかして立たりけりかの笛と申ハ（以下、小枝の由来）】

熊谷は笛とくひとを手にさ、けしそくの小次郎

かもとに行これをミよ修理大夫殿の御子に無官
大夫敦盛とて生年十六と名乗給つるを

たすけ奉らはやと【思ひつれともなんちか弓矢の
末をかへりミてうきめを見るかなしさととひ直実

世になくともあなかしこ後世とふらひ奉れといひふくめ】

それよりしてそ熊谷はいよく／＼ほつしんの思ひ出出来つ、
【後ハいくさハせさりけり】

長門切には両葉とも衍字がある（①一／＼二行目「敵を」衍字
を墨線で消す。②九行目「糸惜く」衍字にミセケチあり）とこ
ろから、転写であることが分かる。注目されるのは「熊替」の
字を用いていることで、この表記を用いる平家諸本は源平闘諍
録のみだが、本文は一致せず、やはり源平盛衰記に最も近いと
判定される。よく知られた敦盛最期の一部であるが、対照する
と、現存盛衰記には熊谷の心中思惟や笛の由来説話が含まれ、
饒舌になっている。この饒舌性が、現代の我々には盛衰記の特
徴としてつよく印象づけられているものであり、殊に作中人物
の心情や事物の起源・由緒を解説する叙述方法は、読み本系諸
本の中でもひとときわ盛衰記に顕著なものである。平家物語の流
動過程には、増補を伴う改訂が行われたこと、読み本系諸本が

共通の性格を有しながらも各々異なる方向に特化していったこと(長門本は室町物語的方向へ、延慶本は仏教文芸的方向へ)を、再確認できる。

(三) 「宇治合戦」

高城弘一氏からは平成二四年一月にもう一点、長門切の写真をお示し頂いている。手鑑に貼られた状態の三行だが、天には界があるものの、一行が十〜九字ずつしかなく(つまり、一葉の上半分が残ったもの)、「世尊寺殿行俊卿」と記した札が傍に貼ってある。

るに舟なけれハとて折

ならハ大手軍に負な

の道につかるへし骸

蓬左文庫本源平盛衰記卷二五「宇治合戦」

向なから舟なしとて暫もこゝにやすらふ

ならハ大手軍にまけなんすさらハ長き弓矢

の道にわかるへしたとひかはねを底のみくつと

長門切三行目の「つ」は「わ」の誤写であろう。田中登氏所蔵

「ければ弓を」切と日比野浩信氏所蔵「さむとて只」切との中間部分に当たると。日比野氏がかつて紹介された「さむとて只」七行も、一葉の下半分が、切られて残ったものであったが、同じ時、同じ目的で切られたのかどうかは、不明である。「さむとて只」切の紙背文書が室町期の書写であるならば、それは手鑑制作より以前に切られたのであろう。

(四) 小手鑑

平成二七年に佐々木孝浩氏が入手された小手鑑にも、長門切の一部が貼り込まれているとので、見せて頂いた。外題は『小手鑑』、綴子表紙の折本で、大きさは一二・五×一二・五センチ、高さ三・五センチ、一面二〜三葉、表裏合わせてちょうど百葉の切が貼り込まれ、各々に特製の小さな極札がついている⁽¹⁵⁾。表の折の一番最後に、「世尊寺行俊の渡/琴山印」の極札と共に、八・五×四・〇センチ(天には界があり、下部には四ミリほどの紙を継いでいる)の切が金色の台紙に貼った上で、貼り込まれている。料紙は、佐々木氏によれば楮の打ち紙であるとうとのことである。長門切の一つに数えてよいと思われる。

本文は

の渡をすへ
わられて申

の二行であるが、一行目の「を」は「越」と読むのかもしれない。「宇治合戦」や「信濃横田河原合戦」の一部ではないかと思見当をつけて、蓬左文庫本源平盛衰記を見ると、卷一五「宇治合戦」に次のような箇所がある。

長井の渡を定たりける程に秩父に舟を

わられて【新田の入道河のはたに引へたり】入道申けるは

前述の高城氏蔵「るに舟なけ」切の一行ほど前に当たると。手鑑のサイズやレイアウトの都合に合わせて、寸断されたらしい。

(五) 墨俣合戦関係記事

「解釈」平成二七年一一・一二月号に「『平家物語』の維盛像——消える戦功——」を発表された仁平道明氏は、御所蔵の長門切一葉を紹介された。天地に界のある（界高二七二〜三センチ）三行で、一行目の行頭には、話頭を示す朱の斜線がある。この朱線が書写と同時のものか後に書き入れられたのか不明だが、

既出の長門切ではこの部分に近い東京国立博物館蔵一二号手鑑所収「して陸奥国」切の中、藤原秀衡宛下文の行頭に朱斜線があり、同じく卷二七に該当する鶴見大学図書館蔵「れは木曾は」切の中、話題の変わる三行目行頭、また卷二六に当たる個人蔵「掌ににきり」切にも同様に朱斜線がある。

去二月二兵衛佐頼朝を追討のために東国へ下

りける人々本三位中将重衡権亮三位中将維

盛兩人を大将として其勢七千余騎源氏打上ると

仁平氏の認定によれば源平盛衰記では卷二七冒頭に当たる治承五年三月の墨俣河合戦直前の記事に、この切に関係がありそうな文章があり、一部は卷二六の記事にも近いが両方とも全文一致してはいないという。延慶本・長門本には共通する文章が見当たらない。

蓬左文庫本源平盛衰記卷二六「天智懷妊女賜大織冠」

八日庁の御下文を以て東海南海西海道へ被下遣

頼朝追討の為には本三位中将重衡を大将軍に仰定らる

同卷二七「墨俣河合戦」

養和元年三月十日頼朝追討の為に東国へくたりし

頭中将重衡権亮少將維

盛以下七千よきは

【尾張国墨俣の西の河原に陣をとりて東国の】源氏を禦かんとす

卷二六の部分には「本三位中将重衡」の名があるが、維盛の名はない。仁平氏は長門切本文中、維盛の呼称が「権亮三位中将」となっていることに注目、治承五年（一二月に養和改元）三月なら右近衛権少将が正しいにも拘わらず、このように記すのは、長門切底本には重衡と維盛とを同じく「大将」として並べて、その戦功を印象づける意図があったのではないかとされた。官位を先取りした呼称を用いて維盛を重衡と並べる作為を推測し、長門切が必ずしも盛衰記以前、原形に近い本文とはいえないのでは、と問題を提起される。本文が卷二七「墨俣河合戦」冒頭部分であれば尤もなのであるが、じつはすでに藤井隆氏紹介の「国へ下りけ」で始まる切があり、これも現存盛衰記「墨俣河合戦」冒頭部と共通する字句を持ち、しかも二葉は直接には連続していないと思われる。「去二月に兵」切が重衡・維盛ら平家の「人々」が主語であるのに対し、「国へ下りけ」切は「平

家」が主語となっていて、文脈が異なる。この問題は次節で改めて検討する。

この切は、裏面に「世尊寺殿行忠卿」「大倉好齋改之」と記され、極印がある⁽¹⁸⁾。大倉好齋は近世末期（一七九五—一八六二）の古筆鑑定家。「改之」とは、別にあつた極書を訂正したとの解釈もできるが、単に「鑑定した」との意にもとれる。極印の角印は判読困難だが黒の丸印は「大蔵」と読める。

さらに注目されるのは料紙の表に縦罫があることである（罫の間に収めるようには書いていない）。長門切の料紙には裏面に縦罫があるもの（卷二六・二七相当部分の一部）もあるが、いずれも罫内に収めるように書いてはいない。罫の有無がまちなものは、料紙が反故紙の再利用だった可能性も考えられようが、漢文体や固有名詞を列挙する部分など、行を揃える必要があつたからかもしれない。改めて料紙の均一性、書写の目的と経緯といった課題が眼前に膨らんでくる。

六 「横田河原合戦」

平成二八年七月に國學院大学蔵となつた手鑑崩しの中の一葉がある。大きさは縦三〇・〇×横六・四センチ、界高二七・一センチ、三行。三行目の一部（へ）は擦れて読みにくい。極札は

「世尊寺行俊卿 せ八三百余騎 印」。一行目に傍書補入があるので、転写であることが推測でき、書写態度は他の長門切に共通している。

せ八三百余騎おめ（い傍書）て渡を見て城太郎あハ

御方ニ勢の付ハ残ハ定ておくれ馳にて馳らん

河な渡しそた、敵ニ向へや者共とて或ハのり

蓬左文庫本源平盛衰記巻二七「信の横田河原軍」

【井上九郎光基はほしな党を相具して】三百よき

【あかはた俄に作出しあか注しを白しるしの上に

付かくして木曾か陣を引くたりて】

しつくと筑摩河をうち渡して城太郎か陣にむかふ案のこ

とく城太郎は

味方に勢付たり余勢は定てをくれ馳にそきたるらんとて

【使を立て云けるはた、今被參人は誰人そ返々神妙御かた

の兵の軍につかれたり】

河を渡して敵の陣にむかひ給へと云ければ

延慶本・長門本（四部本・覚一本も）では、城太郎は合戦場に登場せず、城次郎（四郎）となっているので、該当しない。

盛衰記には似た場面があるが、本文は他の箇所比して一致度が低く、合戦場面の本文流動の激しさが推測される。例えば「おめいて渡」と「しつくと筑摩河をうち渡して」では合戦の様相が異なるし、城太郎の下知も、長門切では「河な渡しそ」とあるのに現存盛衰記では「河を渡して」と逆になっている（この部分は誤写の可能性がある）。通して読むと城太郎は、長門切では勢よくやってくる援軍（じつは偽装した敵軍）に欣喜雀躍して下知するのだが、現存盛衰記では何食わぬ顔で参陣してくる援軍（じつは偽装した敵軍）に対し、こちらの兵は疲弊しているのをそのまま引き返して戦ってくれ、と使者を通じて要請したことになる。

なぜか長門切は横田河原合戦の部分が多く発見されており、この切は鶴見大学図書館蔵「先立たるを」切よりも後、MOA美術館蔵手鑑『翰墨城』所収「籠られては」及び鶴見大学図書館蔵「れは木曾は」一切の直前部分に当たる。「籠られては」切との間には、蓬左文庫本でおよそ八行分あり、城太郎側は疲弊しているところへ現れた援軍に期待して、くつろいでいた為に大敗したとなっている。長門切の方がテンポの速い戦局展開になっているが、義仲軍の勝利という結果は変わらず、ただ盛衰記では城太郎軍大敗の理由が明確化されている¹⁹。

三、長門切のあつかいにくさ

(一) 場面同定の問題

前述の仁平氏蔵「去二月に兵」切の内容が現存源平盛衰記のどの場面に該当するのかは、この切だけを見ていると墨俣合戦関連記事と判定してよさそうであるが、藤井氏紹介の「国へ下りけ」切もまた、巻二七の墨俣合戦の出だし部分と見られていゝる。長門切は複数種類あったのであろうか。

「国へ下りけ」切を藤井氏の翻字によって引くと左の通りである。

国へ(下り)ければ 平家尾張国洲俣の西の河原に陣をと
る 同三月十日東の河原に 武者一千余騎馳来て陣を取る
是は兵衛佐には伯父十郎藏人行家也

この本文には「洲俣」という地名、「三月十日」の日付、「十郎藏人行家」の人名などがあり、墨俣合戦開始の場面であることとはうごかし難いと考える。それに対し前引の「去二月に兵」切の方は、二月に頼朝追討のため東国へ下った重衡・維盛率い

る七千余騎の軍勢のその後の行動をこれから述べることは確からしいが、地名も敵の大将の名もなく、日付も恐らく三月以降であろうということしか判らない。じつはこの辺りは平家物語諸本によって記事の出入りがあり、源平盛衰記によって摘記すると、治承五年初めには平家軍と東国軍との間に次のような事件があった。

治承五年一月 十郎藏人行家が尾張国へ攻め入る

二月 平知盛軍三千余騎東国へ発向、近江源氏を

討ち、墨俣に至る。行家は美濃国中原へ逃走。知盛の病のため平家軍は帰京。

頼朝義仲に与する賊軍征伐の宣旨、城太郎と藤原秀衡に下る

閏二月 平清盛没

平重衡・維盛、数万騎の軍勢と共に頼朝追討のため東国発向

三月十日 重衡・維盛と行家、墨俣で対峙(いわゆる墨俣合戦)

そして治承五年六月、横田河原合戦で城太郎は義仲軍に敗れるが、この横田河原合戦を語り本系諸本は翌年の養和二年九月にずらして物語を構成している。さらに翌寿永二年四月、維盛は

義仲追討のため北国へ向かった。墨俣合戦から北国合戦にかけては諸本間に異同が多く、年次や合戦指揮者などに及ぶ相違がある。改変が繰り返されたと推測され、諸本の展開につれて物語の構成が整えられていったものと思われる。維盛の呼称を追跡してみると、延慶本・長門本では寿永二年正月一日から新三位中将（盛衰記ではここには維盛の名は挙げられない）、以後は権亮三位中将・小松三位中将などと呼ばれ、それ以前は権亮少将となっている。事実上、維盛は治承五年六月に任権中将、改元後の十二月に従三位になった。古活字版盛衰記本文を検索すると、維盛は寿永二年五月の北国所々合戦（巻二八）から入水まで一貫して権亮三位中将と呼ばれ、それ以前は（中宮御産から墨俣・矢作合戦まで）権亮少将と呼ばれる。三本とも「権亮」という職名以外は史実に沿って統一されているといえよう。もし「去二月に兵」切が、養和元年以降の時点で重衡・維盛の動向を、対源氏軍として記述した文章であったとすれば、それは墨俣合戦とは限らない。現存の盛衰記には墨俣合戦以外に重衡・維盛が並んで軍勢を率いた合戦記事はないのだが、あるいは（現存盛衰記に残らなかった過去を追想する記事の一部だったか、北国合戦記事の一部だったか）かもしれない。要は「国へ下りけ」切との関係を明らかにした上でなければ「去二月に兵」

切を根拠に長門切の虚構性を論じることではできないのである。⁽²²⁾なお「去二月に兵」切が墨俣合戦記事の一部であり、維盛を重衡と並ぶ位置に置こうとして三位中将という呼称を用いていたとしても、続く部分で維盛の戦功を描いたかどうかは不明であり、史実に近い方が原形という前提についても、議論が必要である。

長門切本文を比定する際に複数箇所候補を挙げうる例も何箇所がある。例えば出光美術館蔵手鑑『見ぬ世の友』所収「諸社の社司」切は、院の仰せにより諸社諸寺で調伏の祈禱が行われたことを述べるが、現存盛衰記の巻二七「源氏追討祈」の一部と巻四一「義経院参・平家追討」の一部にそれぞれ共通する文言を持つ⁽²³⁾。また鶴見大学所蔵「ありけれと」切は巻一九「文覚発心」の一部と比定したが、巻一七「祇王祇女」にも一致する字句が散在する。これらはもともと似た内容であるためだが、源平盛衰記が、しばしば自身の文章を複製増殖させる創作方法をとることもよる。類似した文章が、回想場面や後日談として別の箇所に見れる可能性はあるのである。僅かな文章から大部分な作品の一場面を特定することの難しさ、長門切の扱いにくさを改めて考えさせられる。

(二) 長門切の書写

前述の高城氏所蔵二葉が衍字をミセケチや墨減によつて処理していることから、長門切は転写されたものであり、しかもその書写は、一筆一押のような態度で行われたものではないらしいことが分かる。従来紹介されていた「高窠帖」所収の「判官の船を」切の中にも「汀」と書くべき所を「汁」と書いて、擦り消して訂した箇所があり、その擦り消し方はさほど丁寧ではない。橋本貴朗氏が紹介された「かな研究」三七号所載の一葉「こそ候へか」切も、仮名書きか漢字を当てるかを選んで墨線で抹消している²⁴⁾。今回紹介した「せは三百余」切の如く傍書補入をしている例もある。即ち長門切には底本があつたのであつて、抄出か全文書写かは分からないものの、いわゆる「原本」ではない。有界料紙・卷子本という、軍記物語にはやや異例の体裁から、豪華本とみなしたくなるが、それは誤りである。むしろこの様式が「物語」でなく「記」に相応する書物として制作されていることを示すと見る方が、平家物語の初期形態を考へるのに有益である²⁵⁾。世尊寺流の書写、大量の卷子本という点からは、有力な背景があつた、かなり大がかりな事業を想像してよいだろう。

料紙は必ずしも均一な揃いのものではなかつたかもしれない

い。何かの料紙を転用した可能性もあり、年代測定を複数実施したら結果に幅が出る可能性もある。但し、池田氏所蔵の測定済みの一葉のみが数百年も遡る古紙であつたとするならば、それにもそれなりの説明が必要であろう。古筆研究者による年代判定も、今のところ炭素14判定の結果を大きく降るものではないようだ。すべての長門切を炭素14判定にかけられない以上、他の証跡を追究していくほかはなく、本文の内容や書誌的形態と共に、料紙の質、書写の様相を改めて個々に検分することが必要になつてこよう。

完成品を儀礼用に写したのではなく、ざりとて切継や大幅な書き入れなどの作業中でもない、(もし全巻揃えば)膨大な分量の卷子本。朱引があることから実際に読まれた可能性が強く、一部には重複乃至は類似場面重出もあつたかもしれない(現存の盛衰記にも、複数の本文を撰取したために重複や自家撞着を引き起こしたままになつている箇所がある)と憶測される。あるいは増補試作の過程で一旦清書したものかとも考えてみたが、絵巻制作のための抄出作業かとの仮説²⁶⁾もあり、書写事情は今後の課題である。

(三) 切断以前の卷子本

平藤幸氏は長門切の切断時期を古筆家了榮（一六〇七—一六七八）か了任（一六二九—一六七四）の頃とされた²⁷。前述の如く切断以前は全巻揃っていたとすれば膨大な分量の卷子本であり、近世以前にその存在に触れる資料はないのか、という疑問が湧く。また「長門切」という呼称は前述の通り一〇代古筆了伴から用いられたらしいのだが、「長門」を冠した由来も不明である。ここで思い出したのが、かつて長門本平家物語の伝本調査を始めた頃（修士論文作成期だったから昭和四三—四五）に見た資料類の記述である。現在では「長門本」という呼称は明確な対象を指しているが、当時はこの名で呼ばれる平家物語が一つの異本に限られているのかどうかも未確認だった²⁸。『国書総目録』に挙げられた平家物語写本の中、冊数の多いものを片端から見て歩き、全国に七十点前後ある二十巻本平家物語が、赤間神宮所蔵の長門本とほぼ同文であることを確認した。赤間神宮蔵長門本（いわゆる旧国宝本）は二十巻二十冊、現存の伝本の中には、目録を付して二十一冊のものや完本ながら合冊して十六冊、十四冊、十一冊、十冊仕立て、あるいは完本で二十六冊、二巻分欠けているが三十一冊などの形態があるが、寛文五年（一六六五）には二十冊であったこと

が『国史館日録』によって確かめられる。ところが近世の随筆・紀行文の類を見ていくと、様々な説が記録されている。『徒然草野槌』（元和七—一六二一年）には阿弥陀寺で十六巻本を見た（但し林羅山が阿弥陀寺を訪れたのは慶長七—一六〇二年ゆえ記憶違いもあり得るか）と記し、『三暁庵随筆』は「下関安徳天皇の御寺」の宝物には五十巻の平家物語があるという。『鬼園小説』（文政八—一八二五年）は世間に写本で流布するという長門本と阿弥陀寺本は同じ物ではないとし、『平家物語図会』（文政一〇—一八二七年）は、阿弥陀寺には八十六巻の写本があり、これを抄出して十六巻としたのが世にいう長門本だとする。当時私は、二十冊の長門本を実見した記録類を優先し、これらの資料を誤伝として却けて顧みなかったのであるが、あるいは異なる伝本に関する情報が入り乱れ、混同されているのかもしれない。一八世紀前半までは阿弥陀寺に秘蔵されていた平家物語（近世末期からは民間でも写され、読まれている）については伝聞や臆説が多く、いつぼう（古筆家には知られていた）大部の卷子本の噂が、どちらも流布の平家物語とは異なる内容らしいというだけで混同されたまま、「長門」（平家滅亡の地）の平家物語として伝わった可能性はないだろうか。

そのほかにも『徒然草野槌』は和泉国から京都へ送られて来

た二十余巻の平家物語を見たとき記しているし、『三暎庵隨筆』は、四十巻の平家物語が「新納又左右衛門殿」の許にあったが火事で焼失したそうだと記す。遡れば『看聞日記』永享一〇年(二四三八)六月二十七日条に「内裏平家一合(四十帖)、依召進之」とあることもよく知られている。切断以前の長門切底本に關する手がかりを、なお諦めずに氣にかけていたい。

四、長門切からの展望

(一) 平家物語の流動過程との關係

今後も長門切は、模写も含めなお続々とその存在が知られるであろうが、資料が増えるにつれ、むしろ解明すべき課題が鮮明になってきた。この資料群を放置しておくわけにはいかない。これまでに得た情報を整理し、すこし遠方まで見晴らしながら、今後進んで行ける方角を探ることにする。

八十葉近くが確認された今日でも、長門切の本文は、現存諸本の中では源平盛衰記に最も近い、という判定は動かない。一割程度は延慶本に近似し、部分的に盛衰記・延慶本・長門本に共通する字句が混在する場合もある。元来、この三本は兄弟關係にあると言われてきたが、長門切が一三世紀末にすでに存在

したとすれば、三本が分岐する以前のすがたを、延慶本寄りではなく盛衰記(の古態部分)を考慮して想定することが必要になる。爾来三百数十年、盛衰記は大きく変容を遂げ、校訂・出版を経て普及し、結果的に時代の要請に応えることができ、近世的風貌を濃くしてきたのであった。いっぽう延慶本は、寺院の中で書き換えられつつ唱導的・仏教的色彩に染まり、長門本は物語的・伝承的な嗜好にはぐくまれて生き残り、阿弥陀寺に奉納されて守り続けられてきたものではなかったか。

もはや現存諸本の中から最古態本を一本選定し、それを以て平家物語を論じる、乃至は史料として使う、という研究姿勢は過去のものとなった。すでに述べた通り、我々の前に現存する諸本はいわば偶然性による残欠の鎖鑰であり、諸本展開の全体像は推理で補うほかはない。

現存する長門切で見る限り、源平盛衰記に至る変容は表現の詳述化や形式的整備、説話の摂取など概ね増補拡大傾向にある。嚴島断簡と延慶本の關係も、同様の傾向を示していた。合戦場面に諸本のゆれが大きいことは平家物語研究ではよく知られていることだが、義仲關係の合戦(横田河原合戦・北国合戦)や義経關係の合戦(屋島合戦)の記事でも、時には本文の対照が困難なほど異同が激しい。いささか想像を逞しくし、次の二点

を仮説として挙げておきたい。

①長門切に義仲関係の合戦部分が多く発見されていることからすると、語り本系平家物語諸本よりも、かつては義仲進出記事の位置づけが大きかったかもしれない。京都人からすれば最初に都へ入ってきて平氏を追い落としたのは義仲であった。その義仲が入京するまでの過程を詳述しようとする努力（情報収集と記事構成の試行）が行われて、しかしやがて縮小されていったという想定は、検討する価値がある。

②屋島合戦は史実よりも膨らませられ、いくつかの挿話が創造されているのではないか。⁽⁵⁾一ノ谷から壇ノ浦までの間に、平氏滅亡というカタストロフィの序として、屋島合戦記事の一群が設けられた。つまり屋島合戦は物語の上で壇ノ浦の前哨戦の役割を担い、平家軍の武士たちが義経軍を振り回し、善戦する場面を設けた（それは結果的に義経にスポットライトを当て、壇ノ浦での平氏滅亡への導入となった）のだった。

頼朝拳兵記事該当所について長門切の有無が分からないのが残念であるが、早期の平家物語では、平家を追い込んでいく過程において、現存平家物語とはすこし異なる視点で、義仲や義経、東国武士たちの活躍が描かれていた可能性も考えてみてよいと思う。

(二) おわりに

これまで年代推定への利用を敬遠されてきた古筆切に依拠して、平家物語の流動と変容に新しい視点を導入することを主張してきたが、古筆切のすべてが直ちにそのような機能を果たせるわけではない。現に伝道増筆（道増の実際の筆跡ではないとされている）の平家切は流布本系の本文であり、ほかに流布本の本文を持ちながら一四世紀前後の伝承筆者名がついているものもある。しかし長門切の発見はその年代だけが問題なのではなく、延慶本一辺倒で進んできた近年の平家物語古態研究に、源平盛衰記の本文もまた比較的はやくから存在していたと考えることを突きつけた、そして本文流動の大枠のとらえ方を再考するように促した点が重要なのである。

成立論・諸本論の新展開と号する所以である。

注

(1) 佐々木孝浩『日本古典書誌学論』（笠間書院 平成二八）四一—二（初出平成二五／二）。なお源平盛衰記卷一—相当部分と卷一—五相当部分、及びそれ以外は別筆であろうとされるが、そのグループ別に本文の性質が異なるとは言えないようである。但し卷一—五は「宇治合戦」を含む。

み、切と盛衰記との間の異同が激しい。

- (2) 古筆鑑定家の中でも了米・了任以降、つまり一七世紀半ば以降の極めが多く、平藤幸氏は切断時期をこの頃かと推測する(平藤幸「新出『平家物語』長門切」紹介と考察、『国文学叢録 論考と資料』笠間書院 中六二六)。
- (3) 中村健太郎「古筆切資料としての伝世尊寺行俊筆『長門切』——伝称筆者と名物切の名称について——(國學院雑誌 平成二五/一一)」。平藤幸「『長門切』問題——平家物語成立論の更新——(リポート笠間59 平成二七/一一)」。注4に同。
- (4) 松尾葦江「軍記物語論究」(若草書房 平成八) 四—三参照。
- (5) 「この「みなして」という点がしばしば理解されずに、延慶本を鎌倉初期の本文として利用する例が見られる。
- (6) 松尾葦江「軍記物語論究」(若草書房 平成八) 四—三参照。
- (7) 松尾葦江「軍記物語論究」(若草書房 平成八) 四九—四頁以下。
- (8) 池田和臣「長門切の加速器分析法による14C年代測定」『文化現象としての源平盛衰記』(笠間書院 平成二七)。
- (9) 僧深賢書状(正元元年—二五九年)に見える「平家物語合八帖」。注6に同。
- (10) 注4に同。
- (11) 注4に同。
- (12) 平藤幸氏注2論文参照。
- (13) 高橋典幸氏の御教示によれば、この当時の人名と官職を当てはめると、藤原季宗⇨春宮権大夫、藤原伊房⇨大宮権大夫、源俊実⇨右兵衛督、藤原家忠⇨三位中将、殿下⇨関白藤原師実、左大将⇨藤原師通、内大臣⇨藤原能長となる。ツレと併せて読むと非参議の近衛中将の装束について知れたがっているらしい。
- (14) 裏面に室町期の医書らしき片仮名交じりの文章が書かれている由である(日比野浩信「『平家物語』長門切の「伝存形態」」汲古45 平成一六/一六)。なお佐々木孝浩氏は、田中登氏蔵の切も横半分につった
- (15) 痕跡のあることを指摘する(注1)。
- (16) 手鑑の定石にほぼ則って作られているところから見て、単なる小型本としての珍しさだけでなく警沢な小手鑑なのらしい。佐々木氏による全貌の紹介が俟たれる。
- (17) 盛衰記・延慶本・長門本はこの箇所「権亮少将」となっている。『吉記』には治承四年二月二日、同五年三月三日条に「権亮」と記すところから、仁平氏は維盛が退任後も権亮と呼ばれたことがあったのではと推測される。この点は、秋山寿子氏もすでに指摘している(二人の「三位中将」『軍記文学の系譜と展開』汲古書院 平成一〇)。
- (18) 藤井隆「平家物語異本『平家切』管見」『松村博司先生喜寿記念 国語国文学論集』(石文書院 昭和六六)。
- (19) 行忠(一一三二—一一三八)は行俊の先代に当たり、東京国立博物館蔵「後三年合戦絵巻」の詞書筆者とされている(橋本貴朗「中世尊寺家の書法とその周辺——長門切——」葉の紹介を兼ねて)『文化現象としての源平盛衰記』(笠間書院 平成二七)。
- (20) あらゆる事象に合理的な説明をつけて記述しようとする姿勢は、現存盛衰記に特徴的な方法の一つである(松尾葦江『平家物語論究』第二章 明治書院 昭和六〇)。
- (21) 注17論文には「某寺蔵小屏風」となっているので、藤井氏の御教示を得て所蔵先に閲覧をお願いしてみたが、代も替わり、寺宝の整理は出来ていないとのことと叶わなかった。それゆえ藤井氏の翻字のまま引く。藤井氏は意味上の切れ目一字アキを用い、行替えは示しておられぬ。なお「下り」二字は傍書補入らしい。
- (22) 松尾葦江「軍記物語原論」(笠間書院 平成二〇) 一—五。
- (23) 仁平氏と書簡で意見交換をしたが、氏は「国へ下りけ」切と「去二月に兵」切とがわずかな間を置いて連接すると推定される。しかし前者は「人々」を主語とし後者は「平家」を主語として、記述の視点を異

- (23) 平藤幸氏注2論文に付せられた「長門切一覽」には、この点誤認がある。
- (24) 橋本貴朗氏注18論文。
- (25) 佐々木孝浩注1著書序編。
- (26) 橋本貴朗氏注18論文。
- (27) 平藤幸氏注2論文二五八頁。
- (28) 昭和前期までは阿弥陀寺本、長府本などの呼称も通用しており、「長門本」で括ることのできる概念を確定する必要があった。調査してみると冊数の多い平家物語の中には平曲譜本や奈良絵本などもあり、現に筑波大学所蔵の平曲譜本の一つには「長門本平家物語」という外題が付せられている。
- (29) 松尾葦江『平家物語論究』三一二(明治書院 昭和六〇)。
- (30) 十二冊説『長崎行役日記』など、三十二冊説『江戸参府紀行』。
- (31) この半月前には「平家絵十卷」を内裏から賜り、三日後に返却している。
- (32) 鶴見大学でも最近、新たな一葉を所蔵されたと仄聞している。
- (33) 松尾葦江「資料との「距離」感—平家物語の成立流動を論じる前提として—」(國學院雑誌 平成二五/一一)。
- (34) 細部の例を挙げると、武士の呼称について、姓と名のどちらで呼ぶかが切と盛衰記とで異なる場合が多く、しかも、切と盛衰記との選択に法則性が見いだせない。この問題はもっと多くの例を集めて考察する必要がある。
- (35) この点は長門切とは別に、すでに述べたことがある(松尾葦江「屋島合戦記事の形成」『平家物語の多角的研究 屋代本を拠点として』ひ

つじ書房 平成二三〇。特に長門切の「与一射扇」関連箇所を見ると、本文形成試行の痕がしのばれる。

*本稿は平成二十八年七月に欄筆し、同九月上旬に投稿したものである。

*貴重な資料の閲覧と紹介をお許し下さった多くの方々に、御礼を申し上げます。